雷丘北方遺跡第２次調査　現地説明会資料

1992年2月29日

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
安田 龍太郎

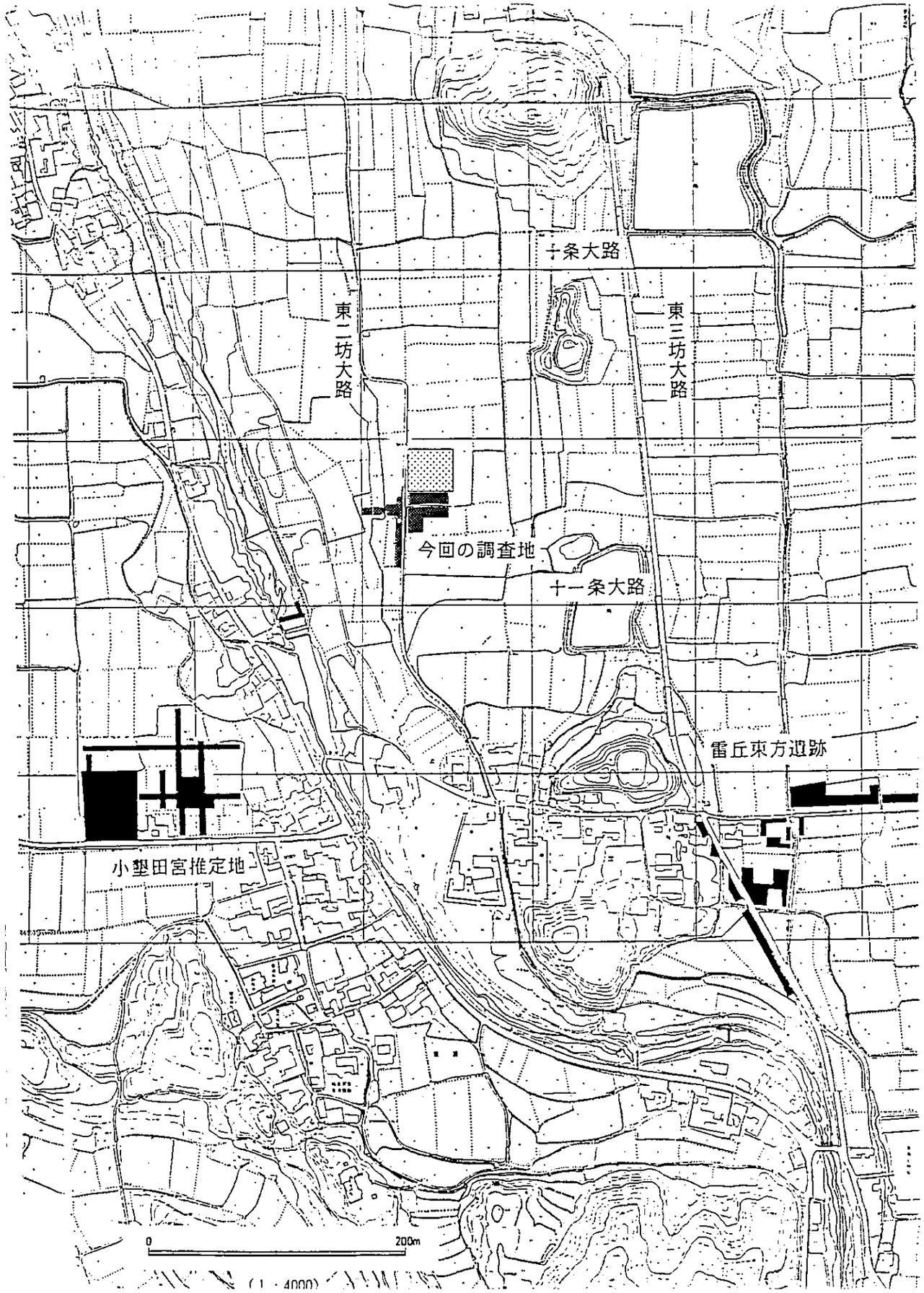
調 査 地：奈良県高市郡明日香村大字雷
調査面積：約700㎡
調査期間：1991年12月1日から継続中

はじめに

昨年４月から７月にかけて、今回調査区に北接する水田の発掘調査がおこなわれ、７世紀後半から奈良時代にかけての、大規模な四面庇建物と、その西方に廊状に並ぶ２本の南北柱列が検出された。四面庇建物は藤原京左京十一条三坊西南坪の中軸線にほぼ合致し、この建物を中心とする空間を回廊がめぐることが想定された。建物規模や廊を伴う形態などから見て、官衙あるいは宮の可能性があり、きわめて重要な遺跡であるとの認識から当調査部では、県道建設予定地とその隣接地を対象とした範囲確認調査を実施した。

遺　構

調査地は雷丘から北へ続く小丘陵の西方で、西約100mには飛鳥川が西北へ流れ、その氾濫原を示す地形が今回の調査区の西端部分まで及んでいる。全体の地形は西方へ低くなり、古代の遺構はこの傾斜地に大規模な整地をおこなってから造られる。西方では約50cmの厚さの整地土が認められる。様々な土を用いているため柱穴などの検出はかなりむずかしい。第１次調査と合わせ、検出した主要な遺構は出土遺物から見て、天武朝末期に造営され、藤原宮期を経て、奈良時代前半に廃絶したと考えられる。また、建物・溝に造り替えがあることからＡ・Ｂの２時期にわけることができる。



＜Ａ期＞掘立柱建物３棟・塀２条・溝４条がある。

建物01は前回調査で検出した身舎３間×２間、四面庇の東西棟建物である。柱間寸法は身舎の桁行12尺、梁行11尺、庇の出９尺、階段用の柱と思われる柱穴が建物の西北に１間分付属する。

建物03は建物01の西約16mにある長大な南北棟建物で、身舎17間×２間、東西二面庇である。柱間寸法は身舎８尺、庇の出は７尺。残存する身舎の柱根は径約30cm、長さは約1.2mである。庇の柱根は径約15cm。今回この建物内部に玉石敷が施されていることが判った。石敷は東側柱列から約2.5m東まで確認できることから、建物周囲から内部全面が舗装されていたらしい。石敷面は建物中心部が高く、周囲がやや低くなる。壁のない吹き抜けの建物であろうか。前回の調査で、建物03の北3.9mに柱筋を揃える建物（建物04）を検出しており、建物03と同規模の南北棟建物と想定される。

塀01は建物03の南約7.2mにある東西塀で、柱間寸法は８尺、柱掘形は一辺約1.2mと大きく、北側からの柱抜取穴が明瞭である。

塀02は建物03の西約5.0mにある南北塀で、柱間寸法は８尺、径約30cmの柱根が１ヶ所残る。南へのびて塀01と接続すると思われる。

溝01は建物03・建物04のすぐ東にある南北溝で、建物の雨落溝と考えられる。幅１m前後、深さ約30cmで、底面に粘土を貼っており、石組溝であった可能性がある。

溝03-Aは建物03の南約2.0mにある東西石組溝であるが、側石の残りが悪く、溝01との合流部分の詳細は不明、Ｂ期に造り替えがある。

溝04は塀01のすぐ南にある幅約6.0m、深さ約50cmの東西大溝である。北岸は大石で護岸する。溝中の北岸近くに約１m間隔で丸杭が打ち込まれ、ある時期に護岸があったことを示す。堆積土中から木簡、木製品、瓦、土器類が出土。

溝05は塀02の西約1.5mにある南北溝で幅約2.6m、深さ約40cm、東岸は石で雑な護岸をしている。堆積土中から木簡、木製品、瓦、土器類が出土。塀と同様、溝04、溝05は南の未発掘部分で合流していると思われるが、両者の規模が異なることから、溝04は西方へ突き抜けるものと推定される。

＜Ｂ期＞建物01がこわされ、建物02がたつ。また、溝01が埋められて溝02がつくられ、溝03が造り替えられる（溝03-Ｂ）。溝02から東側、建物02の南方部分には礫敷が施される。建物02周辺から北側及び溝02から建物03、建物04までの間は小さい礫が入れられる。

建物02は前回検出した３間×３間の総柱建物で、柱間寸法は東西７尺、南北5.5尺。建物01と重複し、中軸線を揃える。

溝02は溝01の東約1.2mにある南北溝である。礫を雑に並べた石組溝で、幅約60cm、深さ約20cmである。

溝03-Ｂは一部で北側石が残り、幅約30cmである。溝02との合流部と東側の状況は不明。

＜その他の遺構＞東側調査区中央部に東西に並ぶ柱が３本残存している。現在のところその性格は不明である。時期的にはＡ期に属する。他に塀02の東側に井戸が１基ある。小さい井戸枠には大官大寺式の軒平瓦などをつかっている。奈良時代以降か。

遺物

木簡・木製品・瓦類・土器類・石製品などがある。その多くは溝02、溝04、溝05、礫敷上面からの出土である。木簡は第１次調査区の土坑、第２次調査区の溝04、溝05などから出土しているが、「評」を記した荷札１点、「黒月」と書いたもの１点を除き、ほとんどが削り屑である。木製品には独楽・斎串・糸巻・形代などがある。瓦類では大官大寺式の軒瓦、重弧文軒平瓦などの他、経文らしき墨書のある平瓦がある。土器類は藤原宮期を中心に、７世紀後半のものが一定量を占め、奈良時代前半のものが少量ある。他に硯・新羅系土器などがある。

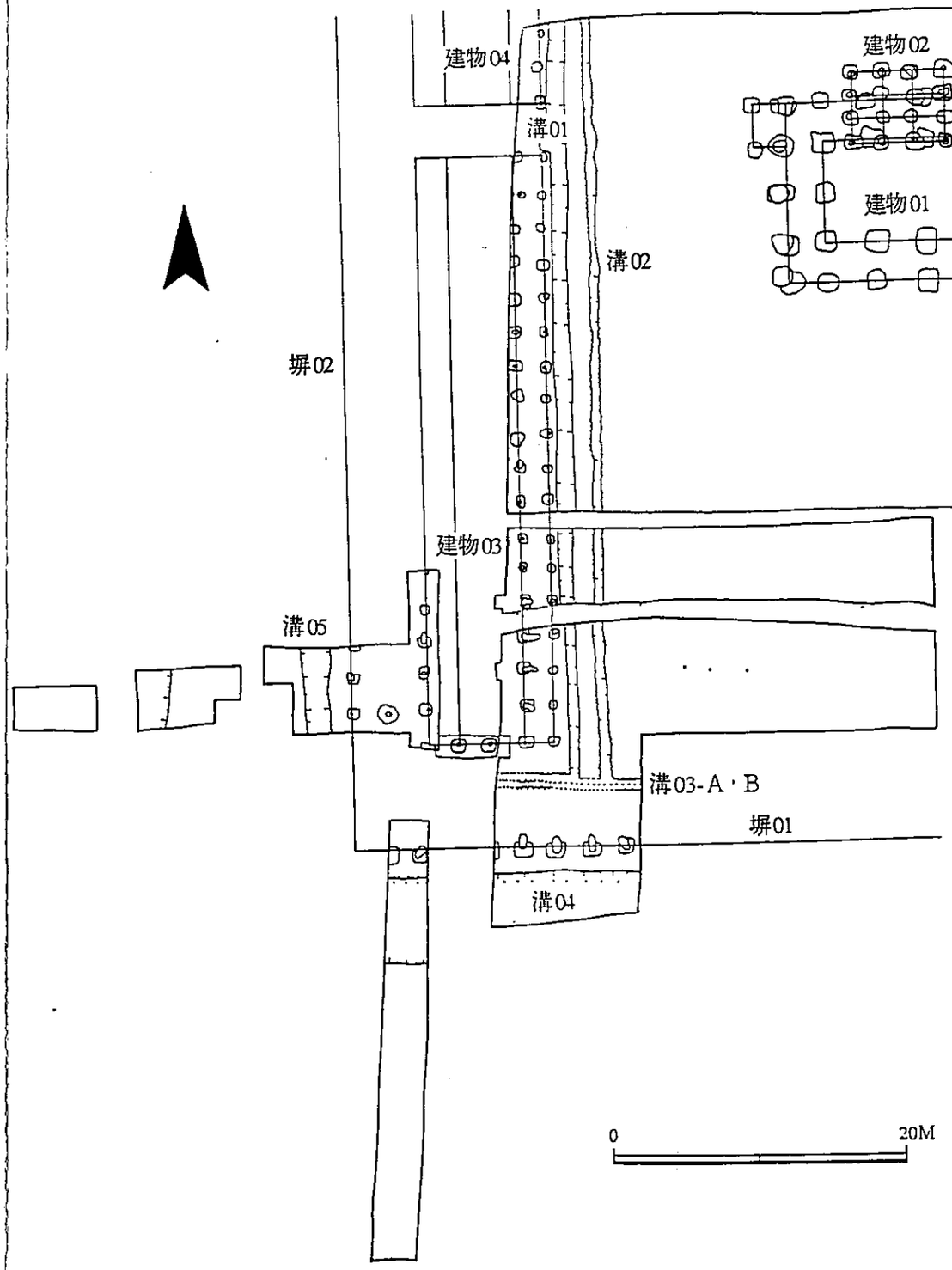
まとめ

①遺構配置　建物配置については、東西棟建物の西方に２棟の南北棟建物が並ぶことから、これを正殿と脇殿との関係でとらえると、正殿を中心とし東側にも同規模の南北棟建物の存在が想定できる。また建物群の西方と南方に、塀と溝とが組み合った区画施設が明らかとなったことから、正殿中軸線上で、

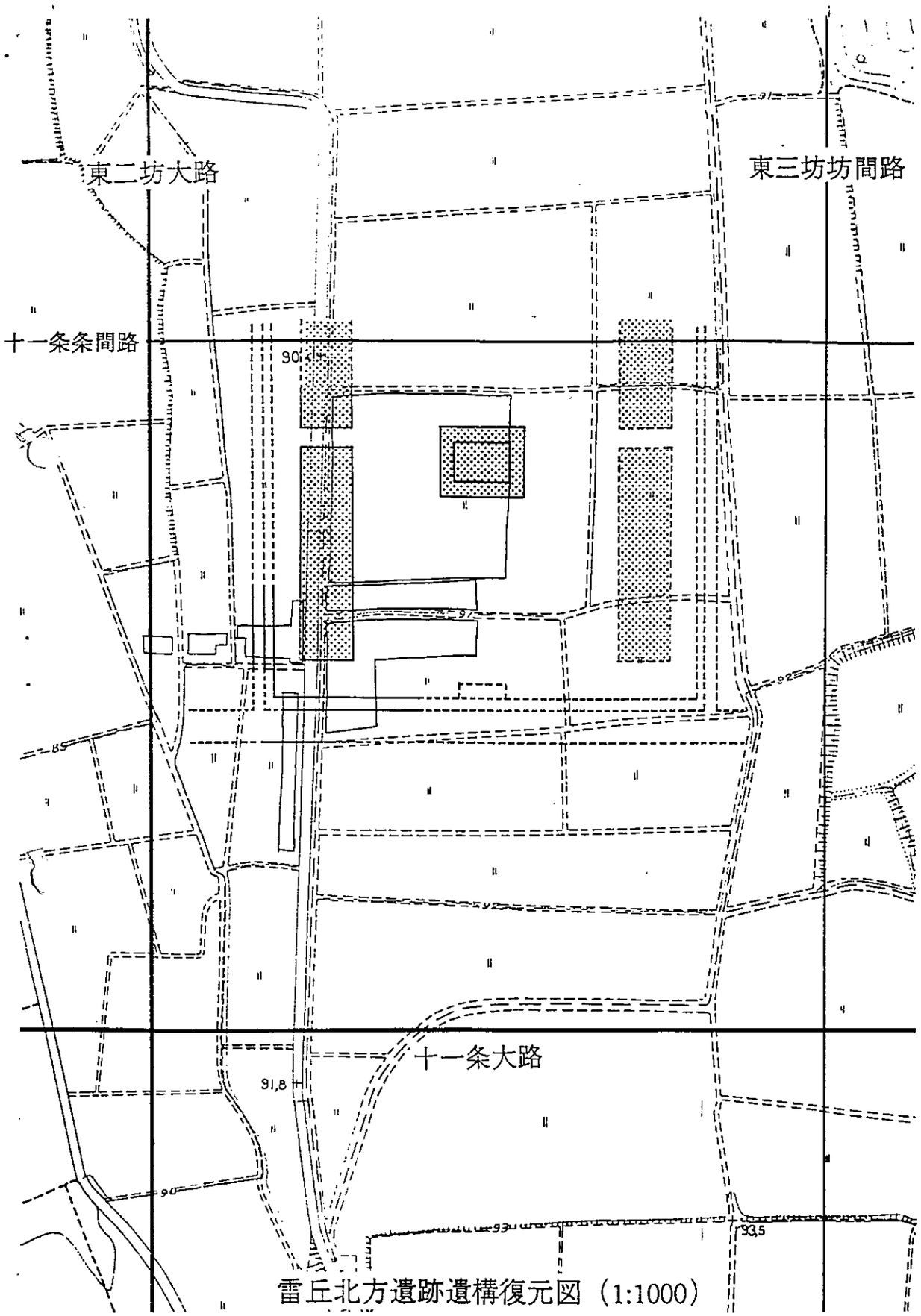
東西塀がとりつく門が想定されるとともに、この遺構の中心部分の東西規模が推定可能となった。また、遺構の配置にはその位置・距離などに計画性がうかがえる。北脇殿の南妻柱列は正殿の北側柱列と揃い、南北塀は南脇殿と柱筋を揃える。東西塀の位置は、正殿中心から150尺にあたり、南北塀は130尺の位置になる。

②占地・条坊との関連　第１次調査で明らかにされたように、正殿の中心は十一条三坊西南坪の中軸線にほぼ一致しており、南脇殿の南妻柱列の位置はほぼ坪の中軸線に合う。このことからこれまで十一条以南での条坊遺構は明らかになっていないが、この遺跡はその存続時期からみても条坊に則したものと推定される。また、２棟の脇殿の状況から、遺構は西北坪にのびることになり、少なくとも二坪分の占地が明らかとなった。さらに建物群の区画施設によって各遺構の坪内における位置がかなり明確となってきた。西側の区画施設から東二坊大路心までは約20mで、路面幅を考えると、溝05と塀02を実質的な西限施設とすることが可能である。南の区画施設については、十一条大路まで約55mあることから、溝04と塀01は中心建物群の区画施設と考えられよう。

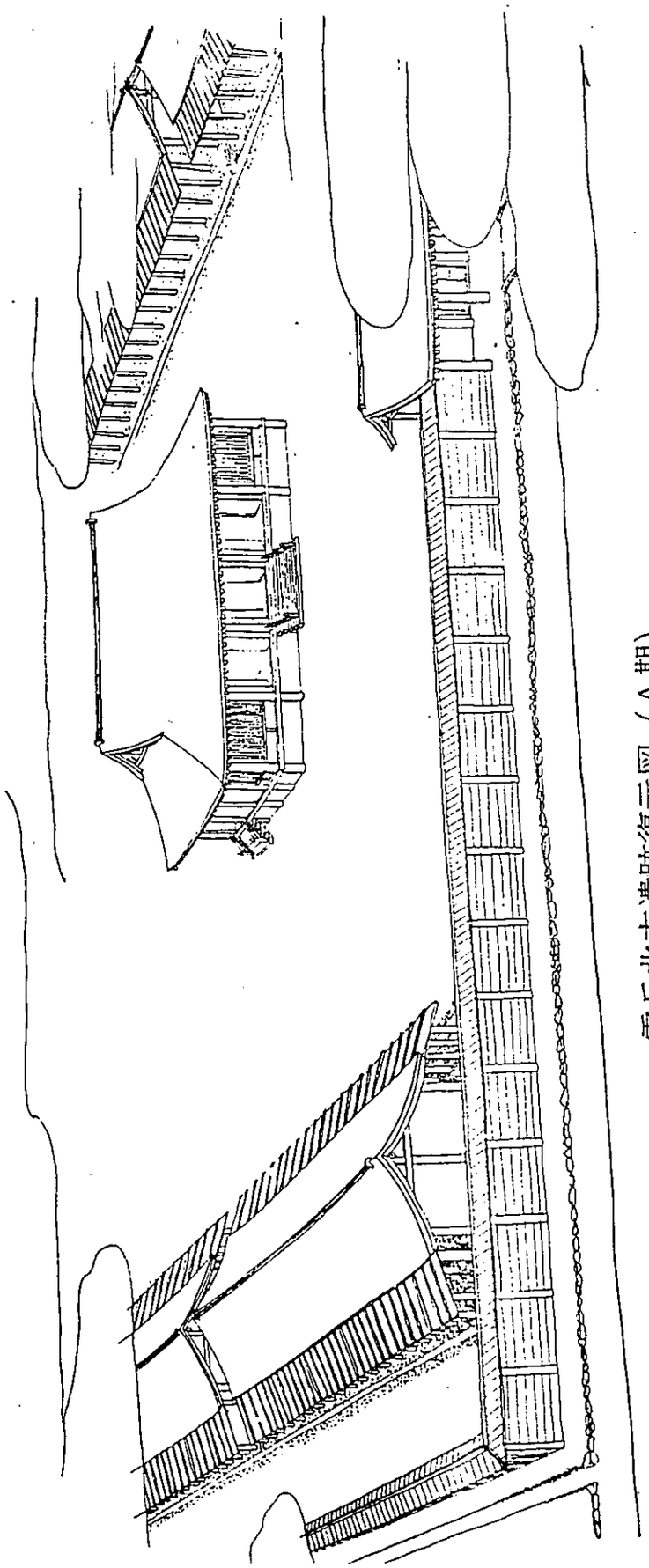
③遺跡の性格　２回の調査によってこの遺跡の占地・規模・建物配置などについての一端を知ることができた。しかしながら、この遺跡の性格が何であるのかは、なお不明な点が多い。寺院、貴族の邸宅、官衙、宮などの可能性があげられるが、遺跡や建物の規模、出土遺物などから前二者は無理がある。先に推定した建物配置について、北脇殿を南の建物と同規模とし、さらに正殿の北に後殿の存在を想定してみると、宮殿遺構として最も典型とされる飛鳥稲淵宮殿遺跡の建物配置と極めて類似した形態となる。コ字形の建物群は政治的な場としての機能が考えられるが、雷丘北方遺跡の場合、少なくとも二坪分占地で、建物群の後方はかなりの空間があり、ここに生活の場を想定することもできる。このような想定を重ねれば宮としての性格を考えることも可能であろうか。しかし、現段階では調査面積もごく一部にすぎず、遺跡の解明には今後の継続的な調査が必要である。



雷丘北方遺跡遺構配置図（1:500）



雷丘北方遺跡遺構復元図（1:1000）


雷丘北方遺跡復元図（A期）